

「実践とは、各人が身をもってする決断と選択を通して、隠された現実の諸相を引き出すことなのである。そのことによって、理論が現実からの挑戦を受けて鍛えられ、飛躍するのである」この意味で、実践が理論の源泉であると著者はいっています。そこで要求されることは、各人が子どもとの間で体験していること、あるいは実践していることを、自分の「ことば」で語ることだと思っています。「客観性」の中に逃げ込まず、理論の名のもとに表現を貧弱にしないことだろうと思います。したがって、それにふさわしい知の共有のしかたも開拓する必要があると思います。

またこの本は、おもしろい指摘がたくさんあります。たとえば「バトスの知」とは「受苦の知」という意味です。私はこれを、子どもと自分がかずれてしまって、しようがなくてあれこれ考え始めることと読みました。もう一つ、「知」とは個人的な形で存在することが基本であるということです。個人的であることを恥じることはないのだということです。読む人によってさまざまに発展していきます。読めばいい本です。

それにしても、「臨床の知」という命名は、それぞれの場で生きることばだと思えます。

(山口大学)

『江戸城の宮延政治』

熊本藩細川忠興・忠利父子の往復書状

『江戸お留守居役の日記』

——寛永期の萩藩邸——

山本博文・著 読売新聞社

大口 勇次郎

江戸時代の大名たちは、一方で国元に城を構えて藩領の村々や城下の町を治めながら、他方では藩邸のある江戸に赴いて將軍のいる江戸城に詰めていなければならなかった。このため国元と江戸のあいだを、一年ごとに参勤交代の制度にしたがって、行列を連ねて往復していたことは誰でも知っている。

では、電話・FAXなどの通信手段のない時代に、熊本―江戸、萩―江戸の間を、一体どのようなしてお互いに連絡し、日常のコミュニケーション

ンをとっていたのだろうか。重要な情報連絡には親書を遣り取りし、簡単な日常事務連絡には役日記という平凡な手段に頼っていたのである。この往復書状と役日記に着目して、十七世紀の幕藩社会を描こうとしたのが、ここに取り上げた山本博文氏の二冊の本である。大名細川忠興と忠利の父子の間で、長い間にわたって遣り取りされた往復書簡を扱ったのが前者であり、萩藩の江戸屋敷にあって留守居役という藩の渉外を担当する役人が長年書き記してきた役日記を取り上げたのが後者

である。

細川家の書簡の方から紹介しよう。十七世紀前半のほぼ五〇年の間に父から子に送った書簡が約二千通、子から父への書簡は約千通が残っている。この他に幕府の年寄や旗本、他藩の大名や家臣たちとの往復書簡を合わせると僅に一万通を超える古文書があるという。受け取ったものは現物が、差し出したものは写しが残っているのである。大名の手紙というと、時候の挨拶や茶会の誘い状を思い浮かべるかもしれないが、それだけではなく藩にとって大きな意味を持つものが多いのである。

十七世紀の前半というと、関が原の戦いが終わった世の中はようやく平和になろうとしていた。背景になる社会情勢を見ると、大坂の陣、島原の乱があり、鎖国が始まるのもこのころである。外様大名、つまり関が原を境に徳川に従った大名たち

は、將軍から絶えずその忠誠を試され、少しのミスでもあれば国替え、取り潰される危険があった。すでに最上氏（山形藩主、二二万石）、福島氏（広島藩主、四九万石）らの大名は、將軍の怒りを買ってこの時代に消えていった。細川氏といえども、いつ同じ運命をたどるか判らなかったのである。

例えば寛永九年（一六三二）を例に取ると、この年一月將軍秀忠が没すると、新將軍家光暗殺計画などという巷の噂が飛び交うなかで、同五月熊本藩の加藤忠広が取り潰しに会い、そのあと十月に細川氏は三十年間続いた小倉の城から熊本に移ることを命じられている。こうした緊迫した状況のなかで、国元に帰っていた藩主忠利の許には、江戸に居る隠居した父忠興から何通もの書状が届いている。それによると忠興は、さまざまなおねをを使って將軍周辺からの情報を仕入れて、憶測を

交えて藩の将来を案じ、細川家の対処の仕方を説いている。將軍をめぐる思惑や保身のための大名の行動など、まさに政治ドラマの裏側を描いて実に興味深い。著者は、これをもって「宮廷政治」というのである。

この複雑な政治ドラマを書き上げた著者は、「本分中の会話にいたるまで、すべて史料の根拠を持って」と自信を持って述べているのは凄しい。史料編纂所で史料集を作るのが本務の著者は、古文書を丁寧を読むことにかけてはプロである。そして過剰な空想を重ねることをしないで、史料の欠けたところは、読む人に余韻を残しておいてくれる。

もう一冊の『江戸お留守居役の日記』については、紹介するスペースがなくなってしまった。この本についてはただ一点、第一級の政治史料を

使って、根回しとか、裏工作の実態を解きあかしたその腕前が評価され、著者の山本氏は第四〇回「日本エッセイスト・クラブ賞」を受賞されたことを指摘しておこう。またこの作品は、テレビ・ドラマに仕立てて過日放映され好評を得たが、その際古文書を解読している著者の姿も一緒に画面に登場したことがあり、ご覧になった方も多かっただけに違いない。テレビも悪くはないが、古文書の世界は、やはり文字から入ったほうが臨場感があって良いような気がする。一読をお勧めしたい。

(お茶の水女子大学史学科)

著者の山本博文氏は、東京大学史料編纂所助教

『江戸城の宮廷政治』一九九三年六月刊 一八〇〇円

『江戸お留守居役の日記』一九九一年七月刊 一八〇

〇円